



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	美しい村とネオツーリズム
Author(s)	佐藤, 誠
Citation	大交流時代における観光創造, 70, 21-42
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34587
Type	departmental bulletin paper
File Information	021-042.pdf



美しい村とネオツーリズム

佐 藤 誠

1. ネオツーリズムの時代

(1) 希望としての美しい村

地域資源を活用した交流人口や移住者の増加策を学ぶために、2007年の夏に、英仏の美しい村々を訪問した。長年の研究パートナーであるバーナード・レーン、「ジャーナル・オブ・サステイナブルツーリズム」編集主幹（元ブリストル大学教授）をはじめ、受け入れ側の準備と地元の方々との討議内容も充実していた。アメニティの高い美しい村々で、都市からの観光客や移住者を受け入れて活気ある地域づくりの仕組みを学び、なりわいづくりに励む人々と出会えた旅であった。

訪問先の英国コッツワルド地方にせよ、人口750人の港町バルフルール村、人口233人の花いっぱい村のブーヴロン・アン・オージュ村、人口576人ながらユネスコ世界遺産のロッシュ城のラ・ロッシュ・ギュオン村という北部「フランスで最も美しい村連合」加盟の村にせよ、田園に活気と誇りが、住民の暮らしの充実がうかがわれて農村の未来に希望を感じた。

思い返すと、都市農村交流が本格化した1980年代のヨーロッパ諸国では、都市で工業の国際競争において日本に負け、農村では農業が米国などとの国際競争でふるわず、経済が沈滞し社会は低迷を極めていた。英国のルーラル・ツーリズムやフランスの美しい村運動は、過疎化し疲弊して消滅の危機に瀕した農村再生をめざして、都市との新たな結びつきで新たな雇用や所得を産み出すこと、そのことを都市からのリピーターである観光客や移住者との交流から、地域資源の現代的見直しと資源性の再発見が生じて、今日の地

域再生がもたらされた。こうした取り組みに日本が学ぶべき点がある。

英国では、グラウンドワーク・トラストに顕著なように、地域住民や地元企業と自治体とのパートナーシップで暮らしに密着した起業からコミュニティ・ビジネスが立ち上がり、ボランティア活動の域を超えて環境・景観再生が新たな雇用創出に結びついた。フランスでは、「フランスで最も美しい村連合」が1982年に20の小さな村（その内2つの村が前記の最初の村だった）が広域連携することで、フランス電力などの有力サポーター企業の支援と全国ネットワーク力による政府との連携で、今では152村が結びついて、パリと並んで田園デスティネーション群として世界に冠たるツーリズム大国の基盤を固めている。

明らかに、英仏のツーリズムは創新の時代を迎えていた。都市からの集客を増やす段階から、ツーリストが訪問先のファンとなってリピーターに転じ、さらにリピーターを村人と共に暮らすアメニティ・ムーバーとして移住者に迎えることで、村の社会構造を多様化し、産業構造を高度化することに成功しつつあるように思えた。景観や村人との関係性が訪問者にとって心地よいアメニティ・リッチな田園こそ21世紀における暮らしの理想の地なのだ。

今回訪れた英仏の村々では、人々が暮らしを楽しみながらコミュニティ活動を活性化しつつ、羨ましいような落ち着いた暮らしを実現していた。こうした村の再生と発展とは一体どういう時代の追い風を受けて実現できたのだろうか。筆者は、1980年代後半から今回お世話になったB.レーン先生から英国のルーラル・ツーリズムについて教えていただいていたが、20年前から伺っていたことを振り返り、日本の展望に手がかりを得たい。

(2) 田舎暮らしが大人気

西欧諸国で、農村のツーリズム振興が政策的に開始されたのは1960年代からである。60年代初頭に2週間の有給連続休暇（バカンス）制度が、全ての社会階層に普及するソーシャル・ツーリズムとして政策的に導入されたが、農村での休暇は子沢山の貧乏な労働者向けのものとされてきた。事態は、80年代に大きく変わった。

農産物価格引き下げに伴う農業・農村の衰退が進む一方で、社会の成熟化、

情報化が進み、高速の情報・交通ネットワーク整備とあいまって、都市住民の農村のアメニティに対する価値評価が急速に高まってきた。教育水準の向上による歴史や環境への関心、本物志向から作り物のレジャーではない、健康で安らぎのある暮らしを実現する場としての田園の発見があった。それが、高学歴・高所得者のバック・カントリー現象となって 80 年代末からのネオ・ルーラリズム時代の開始を告げるようになった。

ネオ・ルーラリズム (Neo Ruralism) とは、米国で 1980 年代初頭から「ルーラル・ルネッサンス」(田舎での人間性復興) と称される、都市から美しい田園への人口移動を伴う、主要にはマウンテンウエスト 8 州 (カナダ国境から南、ロッキー山脈の西) のアメニティ・リッチな田園地帯でのヒューマンなライフスタイルの実現と一つになった農村活性化を表現する概念である。こうした、アメニティ・リッチな田園で人間の名前に値する暮らしを実現するライフスタイル起業で裏打ちされている新田園主義は、1980 年代後半から西欧先進諸国でも顕著な社会現象とみなされるにいたった。

(3) 出会いの記憶を刻む

1980 年代のルーラル・ツーリズムを研究する中で、今回お世話になったバーナード・レーン教授と出会えたことは小生にとって、大変な幸運であった。80 年代後半のバブル経済現象としてのリゾート開発批判をする、その視座を西欧ルーラル・ツーリズム政策から得た。その際に、バーミンガム大学の小山善彦先生に紹介された経緯がある。93 年、バブル経済崩壊を受けて政府はリゾート政策を大転換する事になった。国土庁はその 20 周年記念事業としてリゾート国際シンポジウムを開催し、日本に招聘したのがレーン教授であった。ハードな大規模施設開発型からソフトな「自然や文化」と触れ合うものへと、リゾート像を転換したシンポジウムで、教授が「英国におけるルーラルツーリズムの現状と課題」、筆者が「日本における農村リゾートの課題と展望」と題した基調講演を行った。和歌山でのシンポジウムの後、熊本、青森そして東京と幾つかの都市や農村で欧州のツーリズム政策を日本に導入しようと、二人で全国巡業した。あの種まきの時期には、まだ美しい村連合のことは知らなかったけれども、その後も、九州ツーリズム大学などに数回お

見えになって昨夏の美しい村調査につながった。

美しい景観や心許す人間関係など、アメニティ・リッチな田園の価値が欧米で高まっているが、同様のことは日本でも興りつつある。大都市住民の約4割が田舎住まいを夢見ているが、経済の成熟化、産業の情報化、高速の情報・交通ネットワークの整備、高学歴・高齢化などグローバルな同時代性が、美しい田園での人生実現への期待とそのことによる健康で美しい暮らしに関わる多様な産業展開可能性として、西欧とわが国における将来性なのであろう。

コッツウオルズで、B.レーン先生と由布院での滞在について、また温泉旅館である亀の井別荘とオーナーの中谷健太郎氏について語り合った。私は、ルーラル・ツーリズムの範疇の中に日本の温泉旅館を入れるならば、ある意味では日本のほうが西欧のそれよりもハイレベルかもしれませんよと言った。レーン先生は、「亀の井別荘は、日本一というよりは世界一のホテルだと私は思っている」と言われて、逆に私が驚いた。

数十年前に、片田舎の温泉旅館を継ぐべきか、東京で映画監督の道を進み続けるべきか迷った中谷氏は、叔父の中谷宇吉郎北大教授にアドバイスを得た。エッセイストでもあった宇吉郎氏は、「人生の最後に残るものは出会いの記憶だけである。旅館主のほうが出会いの機会が多く、深い」と、草深い民宿程度の宿を継ぐべきだと告げたそうだ。

当時、別府の奥座敷とされてきた由布院は、中谷氏や溝口薫平氏たちの努力で保養温泉地としての成功を収めたが、これからの「美しい村への変貌」を期待したい。美しい村とは、出会いの記憶を彩る、刻まれた時間の豊かさではないかと思う。日本のアメニティ・リッチな田舎を美しい村として更に磨いていきたい。村を訪れる旅人、村に通いつめる常連や田舎住まい実現者と一緒に、出会いの記憶が美しく刻まれた暮らしのかたちを、由布院や美瑛の連携で日本における最も美しい村連合として具現化したいものだ。

2. 風景と観光

(1) アメニティ資源としての風と光

世界的に、美しい田園景観の評価が高まり、アメニティ・リッチな村では不動産価格の高騰が社会問題化するほどのブームである。現代ツーリズムにおいて、旧来型の観光は飽きられ、訪問先として景観の美しい村の人气が高まっている。しかも、小さな村へ週末ごとの、あるいはシーズンごとや定年後の長期滞在というセカンドホームツーリズムがブームとなっている。また、田園暮らしで健康と美容の実を高めるヘルスツーリズムやエステツーリズムへの関心も高まっている¹。

ネオ・ルーラリズム時代を迎え、わが国でも「観光」についてのパラダイム変換が求められている。アメニティ・リッチな美しい村こそ、時代におけるネオツーリズム発展の本舞台なのだ。そしてまた、アメニティにおいては、風景の要素が一段と重視されてもいる。風と「景」（日と京の合意文字で、数字の京は兆の一万倍であり、太陽がいっぱいの意）がここではツーリズム資源である。

「美しい」ということだが、「羊が大きい」との象形文字から、「美味しそうな土地」のさまが美しい村では重視され、食のアメニティが、それと繋がる農業・畜産・林業の多面的価値が伝承の暮らしの技術と合わさって、ネオツーリズムの内実を構成する。世界的に見れば、南仏プロバンスの美しい村ブームがこうした事情を雄弁に物語っている。眺めて美しいというだけではない、食べて美味しい、住んで楽しいライフスタイルがネオツーリズムにおける旧来型観光との際だった特性といえよう。

暮らしのかたち（ライフスタイル）が問われるツーリズムは、キャパシティ・フォー・ハピネスを追求する成熟社会の「感幸」であり、近代工業文明における非日常の「観光」と異なって第2の日常生活における健康と幸せ

1 拙稿で詳しく論じている。「ネオ・ツーリズムの提唱——グリーンライフとライフウェア産業の創出——」『月刊自治研』2008年2月号 vol.50 no.581 pp.29-41

の実現そのものではないか。そこで、ネオツーリズムの観光創造の意義を、中国古典の解釈と関連づけて以下に論じよう。

(2) 「観国光」の2類型

「観光」という概念のルーツを巡る解釈、つまり語源としての「観国光」の2つの解釈を典型的に論じたい。社会と政治の体制が固まらず混沌と激動を生き抜くために、中国の戦国時代に、変化の先取りで果敢に行動する「君子豹変」の道が説かれた。それが四書五経の一つである『易経』だ。変化を先取りする占いの道具として、世の中を構成する8つの要素がマークされた竹が用いられた。それが、筮竹である。8本ずつ、月・火・水・木・金・土・日と気という八種のマークが刻まれた64本の筮竹には、それぞれに横に太く引かれた、実線と破線の列が三段にマークされている。8×8=64で、64種類の「卦」が生じる。将来の世界の動きは、世界を構成している要素がどのように組み合わせられるかで決まるわけだから、次の時代を先取りする（天の声を聞く）ためには虚心坦懐に筮竹を引き抜いて卦の意味するところを読みとることこそ、君子が君子たるゆえんとされたわけである。

「観国光」は、風（気の動き）と土（土地）の2本の筮竹組み合わせを引いたならば、速やかに君子が取るべき行動内容を規定するものとして受け入れられてきた。実線が二本に破線が一本のマークは「坤」、それと、破線三本のマークは「坤」と呼ばれたが、この卦にたいして、君子は直ちに天命に従ったアクションを起こさねばならない。

原典で『易経』を読んだ。この古典は、様々な古人がそれぞれに卦を解釈する、筮竹による卦の解題集であって、有名、無名の人々が観光の卦について論じているが、その中での特に有力な二説を示そう。第一有力説が「象伝説」である。「巽（風を象徴）が坤（大地を象徴）の上を吹き渡っている様が観である。先王はこれに則り四方を巡視し、住民の風俗を観察して、それぞれにふさわしい教えを設けた」と論じる。この説では、観光とは他国の光を「観る」ことに主眼があり、英語のサイトシーイングに相当する解釈となる。

別の有力な説もある。それが、「程伊川説」であり、「国の光とは、国君の盛徳とその教化の美とをいう。国君は国内の賢者を賓客として礼遇する風習

があり、また外国の君主・使臣を賓遇する」のであり、「観国光」とは良く統治された自国の素晴らしい様を外国に「示す」という点に主眼がおかれる。幕末に、幕府がオランダで「観光丸」を建造した。日本という素晴らしい国の光を列強に示すことを目的に建造されたが、観光にはそうした国の素晴らしさを他国に情報発信するという意味合いを込めている。

『易経』の解説で、赤塚忠は、「観という言葉の意味は、下から言えば、観望・観仰する事であり、上から言えば観（しめす）ことであって、国家の政務に関する」と論じているのはこのことである²。

(3) いのち輝く「風地観ツーリズム」

ところで、「国の光」を見るのか示すのかと二説ある「観光」論とは別のベクトルで「観光創造」論を展開できないだろうか。言い換えると君主の統治論として「国のかたち」を論じる場合、君主が主語で、住民は述語にすぎない。近代国家として富国強兵を競った時代の観光は、素晴らしい景勝地や名所旧跡、ものすごい投資によるリゾート施設が主舞台であった。あるいは、名君めいた知事や組長が地域の素晴らしい取り組みを観光地域づくりとしてアピールする「地域（くに）のかたち」を競う「観光地域づくり」が近年目立ってきた。

赤塚氏が言う「国家の政務」に関する観国光が、素晴らしい他国を見て回るのか、あるいは自国（郷）の素晴らしい統治ぶりを他国に示すのかという2種類の「観国光」とは全く別のベクトルもあろう。ツーリズムの第1類型である名所旧跡観光（サイトシーイングの発地型観光）、第2類型である観光地域づくり（着地型観光）は、国のかたちの巡遊か国威発揚などの国家マターと関わっているが、それとは区別される、暮らしを豊かに楽しくしていくツーリズムの実現が今日的課題として登場してきた。

キャパシティ・フォー・ハピネス（感幸力）が問われる成熟社会の「風地観」パラダイムは、健康で幸せに生きることを人生の目的にしているヒトが主語で、アメニティに富んだ美しい田園が述語である時代のツーリズム誕生

2 赤塚忠『中国古典文学大系 第1巻 易経』平凡社 昭和47年 444頁を参照。

を促す。活き活きとした息吹である人が美味しくも楽しい土地に足繁く通い、場合によっては美しい村に住み着く。GDP や国富という「国のかたち」に先立てて、健康や美容、性や保健など、生きていることの幸せ、GNH(グロス・ナショナル・ハピネス)で「暮らしのかたち」を問う現代のネオツーリズムを論じたい。

「観光創造」を旗印に、「感幸」やGNHを論じる石森秀三教授のツーリズム論を、こうした文脈において理解できないかというのが、本論の基底にあるテーマである。最初に訪問記で述べた観光先進地のフランスや英国、さらには北欧諸国やドイツなどでの田園移住を伴う広義のツーリズムを漢字圏の概念として、観光という卦そのものである「風地観」を用いてみたい。活き活きといのちを吹き込む「風」と、営食でいのちを育む「地」とが結ばれていのち輝く田園でいのち豊かに生きる、そうしたライフスタイル創出に帰結するツーリズムがわれわれの研究対象なのだ。

立派な「国のかたち」である「国の光」を問う観光ではなく、「いのちの輝き」をもとめるネオツーリズムを実現課題としたい。端的に言えば、「観国光」の観光ではなくて、「風地観」のネオツーリズムが求められていると断言したい。世界の息吹が澆刺と充ちた、燦々と日がさす美しい村で健康で幸せな「暮らしのかたち」を具現化したい。そこで、ネオ・ルーラリズムは短期の観光やレジャーの他にも週末の滞在やシーズンごと、定年後のロングステイなどを含むセカンドホームツーリズムやヘルスツーリズムを包摂する。

(4) 『由布院に吹く風』中谷健太郎

ヒトの出会いの記憶がくっきりした結び目として、いのち輝く鮮やかな、「美しいムラ」の「風景」を作ろうという問題提起に衝撃を受けた。中谷健太郎先生が、観光地別府とコンセプトの異なる温泉保養地を西欧に学びながら独自のたたずまいを創造され、更に一步進めて、美しいムラを創ろうと立ち上がる話を、岩波書店から出す話があった。筆者の『リゾート列島』や『グリーンホリデーの時代』³を編集下さった川上隆志氏も、専修大学教授に転じ

3 川上隆志編集の拙著『リゾート列島』岩波新書 1990 年は、バブル期のリゾート開発

るために、この仕事を岩波の編集者としては最後の仕事として、共に中谷先生のお話を伺って至福の時を過ごした。幾度となく「庄屋」（ゴロゴロ部屋といわれる風雅な中谷家）に宿代も払わずにお邪魔してヒアリングしていた際のことだ。

2005 年、美瑛町やカルビー社と「日本で最も美しい村連合」立ち上げに向けた会議を繰り返しながら、合併反対運動で死闘なされる先生からお話を繰り返しお聞きした。思えば、四半世紀以上の間、小生は中谷健太郎先生に私淑してきた。大規模リゾート開発に反対し、農業を人の暮らしと切り分けて食糧生産に特化する農政に楯突き、人と人との素直な繋がりや美しい村の再建を願って、西日本新聞の 21 世紀委員会ツーリズム部会や由布院親類クラブ、九州ツーリズム大学での長々とした議論の結論が、小さな美しい村を創ろうということだった。そういう意味では、筆者のネオツーリズム論は由布院に源があり、あの盆地から吹いてくる風に語らされているとも言えよう⁴。

3. 心とネオツーリズム

(1) 結うことと結ばれること

いのちを吹き込む「気」の動きである「風」（おとこ）と、いのちを育む「土」の大地（おんな）とが「結（むす）ばれると」新たないのちが産まれる。生

について NHK 取材などによる現地調査と経済学の構造的分析をあわせて政策批判を行うと同時に、バブル崩壊後のツーリズム開発について欧米の歴史や現状に学びながら、日本各地での希望の展開の芽を紹介した。同編集者による拙著『グリーンホリデーの時代』岩波書店 2002 年は本来は一つの諸要素がバラバラにされることが病気や経済・社会の病理であるので、無秩序に解体された全体像を一つに纏める力を「ホーリー・デー」に求めた。

4 熊本大学教授の伊藤洋典教授が川上編集者や筆者と中谷先生の対談を取りまとめる上で献身的作業をなさったことも、改めて思い出して感謝の念でいっぱいになる。その成果は、中谷健太郎『由布院に吹く風』（岩波書店 2006 年）の「春風問答」（pp.113-178）で具現化した。

産（せいざん）されたいのちが男であれば「むすこ」、女であれば「むすめ」とされる。

古語で「むす」とは異なった属性のヒトやモノが結ばれることで新たないのちが産み出されることを意味していた。「結う」とことと同義である。そのことを自覚したのが、先生が由布院町が合併で消えてしまう事へ死を賭して抗議する活動に繋がった際のことだ。ただの田舎町にすぎない「ゆふ」は、実は万葉集にある詠み人知らずの歌にもあると言われた。「おとめらの ほうりの髪を ゆふの山 雲なくし 家の辺りみむ」に。

由布岳の峠で、前夜まぐわったおとめが髪を結っているであろう。雲よ、せめていい人の家なりと見たいのでかくさないでくれと詠んだ防人の歌という。寝乱れた髪を「ゆふ」と、弁髪のように「束ねる」とは違うのだと力説された。一本一本の髪の個性を認めた上で、ふわっと美しい形にゆふのと、冷たい経済合理性を貫くために個性や違いを捨象して強引に束ねるのと、暮らしのかたちや町の形が全く違ってくるのだと。

バブル期にリゾート開発に反対して、中谷先生と議論して創ったコピーが「ムラのいのちを都市の暮らしへ、都市の力をムラのいのちへ」であった。九州でのツーリズム運動は、前出のバーナード・レーン教授を通しての西欧動向の取り込みもさることながら、都市と農村との間に「親類関係」を再興しようとの意志によっていた。モノや金だけで、農村と都市とは結ばれてはいないのだ。ヒトが心通わせて結ぶことで、ヒトが元気を取り戻し、いのちの豊かさに充ちた暮らしのかたちが現出することを願っての「往来」（ツーリズム）をどのように盛んにするかが課題なのだと。

中谷先生は、40年以上も情熱を傾けて従来型の観光を破壊し温泉保養地をつくろうとしてきた。しかし、これからは小さな「美しい村」を創りたいとおっしゃられた。今思い返すと、先生は観光から観光地域づくりをへて、いのち豊かな暮らしのかたちをムラ中で小さく結うて、都市や世界と大きく結んで美しく豊かなムラを産み出す戦略を語られていたのであろう。加賀から80年前に由布院に「ながれてきた一家を 黙って支えてくれたのは身近なムラの人たちです」、「小さな町こそが美しい」との信念から「そこから強い生産力と資本の活力がこの町に産み出されてきたと思うのです」と述べられて

いる⁵。

筆者は、この文を書きながらジョン・ラスキンの事を思い出す。「本当の生産とは、工業のように死んだモノを創ることではなくて、いのちある人を産み出すことを言うのです。真の富の色は黄金色をしてはいません。それは深紅です。目の輝いた、頬の赤い青年男女こそが本物の富なのです」と『この最後のものに』で語っていた。19世紀末の英国で、工業都市文明を批判し、湖水地方のレジャー開発を止めたラスキンこそ、美しい村ルーラリズムの元祖といえよう。

しかし、現代において、ネオ・ルーラリズムは勃興著しい、従って矛盾も甚だしいアジアにおいてこそ、その思想的展開ルーツも深め発展させていくべきであろう。

(2) コミュニケーション力としての「心」

アジアの思想において、「風」とは何であろうか。四方八方に自由に吹き渡る風は、各地の情報を結び、感動や共感の輪を広げ、ヒトと自然との生命的結び合いをもたらす。風は地のバラバラなモノやコトを一つに結び、いのち継ぎの力である「気」力を有している。往来を通して気心が知れ、全体性を回復して元気を取り戻したヒトも自然も「交心」（コミュニケーション）力を発揮する。こうした文脈でネオツーリズムを理解したい。

成熟社会の経済は「感幸力」（キャパシティ・フォー・ハピネス）が問われるとルーマニアの物理学者であるガボールが論じている。米国の著名な経済学者のガルブレイスは、日本経済新聞の「私の履歴書」最後のコラムで、これからの日本ではモノと金のGDPではなくて、暮らしの楽しさや喜びを測るGDE（国内総エンジョイメント）という物差しを持つと説いたが、欧米人の言説とは別途に、幸せや楽しさ、人生の喜びについて、これを抽象的事象ではなく、アジアで生きる人の問題として、具体的に暮らしや経済事象として論じるツーリズム論が必要だ。

思い出すのは、モノから心へと時代転換が叫ばれた1980年代に、奇妙なり

ゾート・ブームが生じたことだ。あらゆる国民の意識調査で「こころ」重視が目立った。しかし、残念なことに、当時、「こころ」は抽象的にしか把握できなかった。それが、経済政策としてはむちゃくちゃな、観光やレジャー、レクリエーションやリゾート乱開発に結果していった。

「心」とは、本来は一つのモノなのにバラバラになったモノやコトを、その全体性回復力によって一つに結び合わせる3つの器官が身体に付いているという表意文字である。

体を表す縦軸線に、上部にヘッド、中部にハート、そして下部に臍という3つのコミュニケーション力を有す器官がくっついているという象形文字が「心」だと、中国の上海で中国人医学者から伺った。英語の「コミュニケーション」を中国語では「交心」と訳すとも。また、日本語で言う「臍」は中国では「心帯」だとも。

世界は混沌としていて、バラバラでは成り立たない。人は元気に暮らしていく上で、カオスに道筋をつけて一つの調和ある全体像を取り結べなければいのち豊かに生きてはいけない。そこで、頭は理性を介して言語コミュニケーションで世界を一つのモノとして了解し合う能力器官として、ハートは感性を介して共感や感情で全体を結びつける力として、「心帯（臍）」は母子や宇宙との気の繋がりでいのちを結ぶ生命力交信器官として、それぞれに重大任務を帯びて身体と一体化して存在している。

比喩的に言えば、80年代前半までの日本は、工業化を通してハードな身体づくりに専念してきたが、心が問われた時代は、知的・情的・生命的コミュニケーションというソフトウエアが重大だとの認識が「心」を問題にしたのであろう⁶。産業・経済趨勢から見て、ハードウエア、ソフトウエアからのいのちの豊かさ「ライフウエア」が今日の課題として登場してきたとは言えないであろうか。

6 筆者は、丸善から『農業大辞典』を出す上で、農業農村の多面的価値において「人間性回復の価値」項目を学会から割り当てられ、苦悶して考え、こうした「心」をコミュニケーションによる全体性回復力として読み返す上で、東洋の考え方を全面的に取り入れた。

(3) ムラのいのち

大地に根ざして食を得ていのちを繋ぎ、人と結ばれて新たないのちを産み出しながら、たった一度の人生を心おきなく豊かに過ごす以外に、人として良いことはない。こうした、いのちの繋がりごとに、アジア的に表現すれば「風地観」、欧米流に言えばネオツーリズムは、暮らしの根幹に深く根ざしている。

なぜ、美しい「ムラ」なのかといえば、それは農業・農村がその多面的価値として「ひとの人間性回復機能」を有しているからであろう。ラスキンの言えば、いのちを奪った後に組み合わせて死んだものを組み立てる工業の「死産」の原理から、都市においてはいのちを甦らせるネオツーリズムが望み薄だからではないか。いのちを産み出す、真の意味における「生産（セイザン）」は工業や一次産業と並んでネオツーリズムでしか望み得ないのではあるまいか。

第3のイタリアを調査された中谷先生は、亜流工業の農業では農村が「出荷市場」として展望をもてないが、都市の人とツーリズムで結ばれた美しい村は「集荷市場」として繁栄が可能だと言われる。地場製品の一番美味しいものは、その村でだけ消費する。美しい村に近在の素晴らしい産品を集荷して、旬のものを美味しく食べ、一級品は繋がりを持つ都市の仲間にだけ送る。

「九州のムラ」誌の養父編集長は、「ムラのいのちを都市の暮らしへ、都市の力をムラのなりわいへ」とそのツーリズム論を纏めている。

4. ライフスタイル起業とライフウエア産業

(1) マージナルエリアで生まれた「ライフウエア」概念

2005年の11月に、筆者は中国生産力中心(CPC)という経済団体に招かれた。その50周年記念講演をせよとのことであった。事前に、拙著『グリーンホリデーの時代』(岩波書店2002年)が生産力中心から『Green Holiday: Nosari 迎接緑色假期時代』として翻訳出版がされてもいた。電子工業のトップ企業総経理でもあるCPCの張総経理の指示によつての事というが、記念講演に先立って、台湾経済の展望として、「佐藤教授のご本にインスピ

レーションを得て、産業経済の長期趨勢としては、展開軸心はハードウェアからソフトウェアへ、更にライフウェア産業に移る」と断言された。

台北での経済・政界のビッグイベントの一部、大学のシンポジウム会場で小生は突然「LIFEWARE」提唱者に祭り上げられ、翻訳書にサインを求める方々が列をなしたのには、びっくりしてしまった。

人口3千万人にすぎない台湾は、中国との関係もあり、将来展望に苦しんでいる。工業生産力という点で、コスト安の中国に勝てず、ハードウェア産業に未来はない。ソフトウェアについても、日本・米国・印度との競争に勝てそうもない。何かの産業展望を得ようと考えに考えたあげく、筆者が説くグリーンホリデーの思想にヒントを得て、「心」と「田園環境」との新結合によって、共生システム創考のライフウェア産業を創造し、その新産業を伸ばしながら、それとの新しい結びつきでハードウェア産業やソフトウェア産業のイノベーションを図っていこうと展望を語られた。

苦悩の中から創造的に挑戦する経済トップの姿に、マージナルエリアで新時代が生まれるというマックス・ウェーバーの論を思い起こしたことである。

帰国して、この張理論に関連してインターネットで色々調べたが、米国に日常雑貨店に LIFEWARE という店があるくらいで、とりたてて重視すべき概念としては存在していなかった。張総経理の理論展開はシュンペーターによっていたので、次いで生産諸要素の「新結合」がイノベーションを生むという経済理論を読み直した。

(2) ハードウェア、ソフトウェア、ライフウェア

シュンペーターによると、生産とは存在する物や力を結合することに他ならず、生産諸要素を新たなベクトルで「新結合」(Neue Kombination このドイツ語の英訳が Innovation) が遂行される結果、新たな経済発展がもたらされる⁷。

農業や工業における物づくりの経済は、労働・土地・資本・技術という実

7 塩野谷祐一他訳、シュンペーター『経済発展の理論(上)』岩波書店、1977年、pp. 181-182 参照。

態生産要素の結合による「ハードウェア」産業であり、1980年代以降は、知識・情報・知的財産という新生産要素の結合によって「ソフトウェア」産業が勃興している。ハードウェア経済社会における生産資本は機械・工場であり、その生産性向上のインフラストラクチャーは道路・港湾・空港などであり、したがって都市がこうした量産・機能・生産力重視の経済システムの中軸であった。

しかしながら、ソフトウェア経済においては、その生産資本は人間そのものであり、知的生産性向上のインフラストラクチャーは多様な人材のサイバー・ネットワークである。この経済産業段階は、パソコンと光ファイバーの普及によって、人材が集積している大都市でなくても機能するようになって、どこでも経済活動が可能となった。生産資本が人間の頭脳、ハートであり、その生産性を担保するものは、アメニティが高く美しい生活環境そのものである。

欧米で1980年代から開花した、「ルーラル・ルネッサンス」(米国)「バック・カントリー」(英国)に集約される、大都市から美しい田園への人材移動をばねにしたネオ・ルーラリズム時代の幕開けは、有史以来初めて、都市から農村への人口移動トレンドをもたらした。

80年代以降の米国ツーリズムで最も人気があるのは、大草原での牧場暮らし「デュード・ランチ」であり、ワーキング・ランチや学習ランチであり、カナダ国境以南でロッキー山脈から西側に位置する、かつては牧畜産業しかなかった後発地域のモンタナなどのマウンテンウエスト8州に、大都市からの優秀な人材の移動が顕著となった。

当初は、乗馬やスキーなどで訪れたツーリストはリピーターとして田園リゾート地になり、最後は「テレコミュータ」(田舎住まいの知的生産者)となって移住する現象が生じた。ツーリストの他にも、豊かな老後生活をエンジョイするために、相対的に物価安の田園で年金暮らしがブームとなった。90年代には十年間で約230万人がこうして暮らしの拠点として田園を選択し、可処分所得の高い高齢者への生活サービス提供や、快適な田園生活が生産性を上げる、ストレスに晒されがちなSE、デザイナー、編集者、アーティストの勤労スタイルが、ゆとりを持って家族と共に人間らしい暮らしを実現できる

ライフスタイルを確立した。

(3) 健康・美容・性・保健サービス産業が基幹産業

さらに、優秀なテレワーカーの人材集積がある田園への知的企業が進出すると共に、美しい田園での田舎暮らしが健康や美容、エージングセックスや予防医学に最適なロケーションであることから、米国ではこうした GDP の 16% を占める暮らしの産業が第 1 の基幹産業となった。知的かつ感性あふれる暮らしは、ヘルスプロモーションで生命力を高めることもあって、心と田園環境という、新たな時代の生産元素が「新結合」して、交心（コミュニケーション）・持続性・生命力がキーワードとなっている「ライフウエア」経済産業が、ネオ・ルーラリズム時代のライフスタイル産業をベースに開花する。

ハードウエアからソフトウェア、さらには両者を前提にライフウエア産業・経済が発展趨勢として、観光から観光地域づくりさらにはグリーンライフへとツーリズム形態がこの趨勢に対応して形態を変容させ、関わる産業領域も大きな広がりや深みとを増してくる。（図 1「ハードウエア、ソフトウェアとライフウエア」を参照）

産業イノベーション範疇	ツーリズムの 類型と主題	ツーリズム イノベーション範疇	類型別ツーリズム産業の特性 （主導する推進力）
ライフウエア （共生システム考創） 交心・持続・生命力	第3類型 （21世紀以降） グリーンライフ Lifestyle	■ネオツーリズム （観光・ニューツーリズムとネオルーラリズムとの新結合で、ロングステイ、2地域居住・移住を含みグリーンライフを実現）	・食、健、美、性、保健の感幸産業 ・ライフスタイル起業 ・セカンドホームツーリズム ・ヘルス・エステツーリズム ・アメニティ・ムーバー （生命的感幸力）
ソフトウェア （知識智財創発） 高質・速度・想像力	第2類型 （1980年代～） 自国の光を示す Inbound	■ニューツーリズム （自然志向、体験・交流型）	・着地型ツーリズム ・一次産業、6次産業化 ・観光地域づくり ・地域情報発信 （コミュニケーション力）
ハードウエア （資源要素整合） 量産・機能・生産力	第1類型 （19世紀から） 他国の光を見る Outbound	■観光 （短期・周遊・金銭消費）	・発地型バックツアー ・名所旧跡 ・商業主義 ・装置型産業 ・旅行業・宿泊業・運輸業 （価格競争力）

図 1 ハードウエア、ソフトウェアとライフウエア
—— 産業経済の発展趨勢とツーリズムイノベーション ——

余暇先進国において、ツーリズムは成長が最も早い基幹産業であると言われるのはこうした意味内容においてである。

(4) ライフ・マネージメントこそが経済の本質

経済とは何か、根本から問われる時代にわれわれは位置している。

Oekonomie (独) はラテン語の *economie* に由来するが、その原義はギリシャ語の「オイコ」(英訳すると *Life*) に 2 格のエスがついて、「ノモス」(英語の *Manegement*) と合わさった「オイコスノモス」(*Management of Life*) である。古から現代に至るまで、人間の経済活動は暮らし (*Life*) を支えるための物財や情報のマネージメントである⁸。

英語で言う「ライフ」とは、その本質は「生命」で、その持続は「営食」による。食をどのように営むかということで「生業」があり、そうしたいのちの形が「生活」と呼ばれている。さらに、上記のように様々な暮らしのかたちがあるわけだが、そうしたヒトの暮らしを時間のベクトルで称すれば「生涯」、意味を付加すると「人生」ということになる。

物的欠乏から開放された成熟社会において、経済とは生命力が高められ、健康で美しく、生涯現役で病気から自由な「暮らしのマネージメント」そのものとして出現している。様々なライフ局面で、いのちのありさまや暮らしのかたちがストレートに問われる時代に入っている。国家や会社の壁に守られなくてもヒト同志が密接に繋がることさえ出来るならば、ヒトは自由に美しく人生を全うできる。暮らしのレベルは緑の環境、アメニティで決まるといふそんな時代に入っている。

(5) ライフスタイル起業家の登場とライフスタイル産業

所得最大限をめざさなくても、自分らしい暮らしを実現することが経済活

8 ちなみに、ドイツ語の *Oekologie* はラテン語の *ecologie* に語源を持つが、この概念もまたギリシャ語の「オイコ」(*Life*) と「ロギーエ」(*Logic*) がくみあわさった「オイコロギーエ」に源を有している。つまり、経済と環境とは同じ本体である「ライフ」の「論理」と「マネージメント」として繋がっているのである。

動の最終目標として意識される現代社会において、自由時間（余暇）最大化と大地に根ざした健康ライフが経済産業の最大の市場を形成することは当然ともいえる。欧米で顕在化している（日本でも散見される）「ライフスタイル・アントレプレナー」（Lifestyle Entrepreneur）が創造的かつ多様に展開しているライフスタイル産業は、その舞台が大都市ではなく、美しい景色と伝承のある暮らしに根ざして生き得る田園であることは理の必然でもある。

(6) いのちの賑わいに満ちたアジア・グリーンライフ

さらに、自然の豊かさに恵まれ、いのちの多様な賑わいに満ちた、古からの暮らしが脈々と残されている東アジアの田園こそ、多彩なグリーンライフを享受出来るというという観点から、世界のライフスタイル経済産業の中心となることもまた、同じ論理から容易に推測される。「アジアで最も美しい村連合」のグローバル戦略は、2010年代後半に予測されている東アジアでのツーリズム・ビッグバンを介して、ライフスタイル経済産業の本格的開花を準備するものとして構想されるべきであろう。

近代において欧米の植民地であり、価値観の中軸を欧米に置かざるを得なかったアジア諸国においても、生活地域に固有の生活文化に根ざした暮らしの価値評価が進み、高速情報・交通アクセスと魅力に満ちた多様なアトラクションと高いアメニティが基準の3A型ツーリズムを介して、平和で生命に満ちた暮らしを享受するライフスタイル経済産業が勃興するであろう。

列強との生存をかけた争いから「国のかたち」を強烈に意識せざるを得なかった日本、輸出向けのハードウェア産業に特化せざるを得なかった日本企業が主役の時代が終わった。「暮らしのかたち」を問うライフウェア産業・経済時代に、これから生じる東アジア・ツーリズム・ビッグバンを介して、わが国は東アジアと欧米の文明の架け橋になる。アジアの東端、西欧の西端に位置する日本の目指すべきは、暮らしの環境負荷が最小限となるグリーンライフ先進国になることではないだろうか。数万の美しい村々と数百の都市とがチャーミングに結ばれることが緑の地球に生きるライフ・マネジメントの究極の姿であろう。

6. ホリスティックなネオツーリズム＝観光創新にむけて

(1) ツーリズムの3類型

①西欧近代のツーリズムは諸国家の経済発展と関わって産業発展してきた。これまでの観光は、2つの類型でくくられる。第1類型の「観光」（名所旧跡をマスで「見る」ハード・ツーリズム）、第2類型の「観光地域づくり」（着地型のローカルから「示す」ソフト・ツーリズム）は、共に「国のかたち」（「地方のかたち」を含む）をどのように整備するかと関わって形成されてきた。

図1との関わりで言えば、ハードウェア産業のキャッチアップ過程ではアウトバウンドが、ハードウェア産業において欧米を凌駕した段階からはインバウンドがツーリズムの根本テーマであった。

②しかしながら、私たちが目指すツーリズム・イノベーション＝ネオツーリズムの創造は、最近のアジア経済勃興を受けて、中国の「風地観」や日本の「たび」や「むす」という古来からの思考様式を基盤として、東アジアの別のパラダイムに立って考創される。

③第1類型の観光、地方自治の時代における知事や市町村組長の見識を示すという第2類型の観光地域づくりは、「国のかたち」を見る、示すという観点の違いはあっても、共に、君子の「観国光」は国家の政務にかかわる課題であった。

④これに対して、21世紀になってエステ・ヘルスツーリズムにおいて、ホリスティックな癒しの技術が再評価されアジアの漢方や呼吸法などのローカル・メディスンが評価され、健康や美容の旅や湯治滞在などアジアルーツのツーリズムが勃興している。

もう一つの流れとして、由布院での観光創造の実践や地元学の取り組みなどから、異なった属性のものが新たな結びつきのなかで「いのち」を産み出す「むす」効果、また、バラバラなものを一つに結ぶ「心」のコミュニケーション力への着目を重視したい。食や住、健康で美しいことや遊びという、楽しく幸せな「暮らしのかたち」を整える「感幸」産業の勃興が取りざたさ

れている。(図2 Lifeware産業の概念図を参照)

⑤日本は欧米に学びアジアで習うことでホリスティックなネオツーリズムを文化・社会・経済全体に関わる「暮らしのかたち」産業(ライフスタイル産業)、ライフウエア産業として展開が可能であり、アジア・ツーリズム・ビッグバンの要として立ち上がることが出来よう。

米国や北欧諸国などの余暇先進国では、6世帯に一つの割合でセカンドホーム(モービルホームやキャラバン、宿泊可能なヨットやボートを含む)を所有し、親類や友人のそれを借りることなどで2世帯に1世帯がセカンドホームツーリズムで余暇をエンジョイしている。

また、米国のGDPで、「健康・美容・性・保健(プリベンティブ・メディ

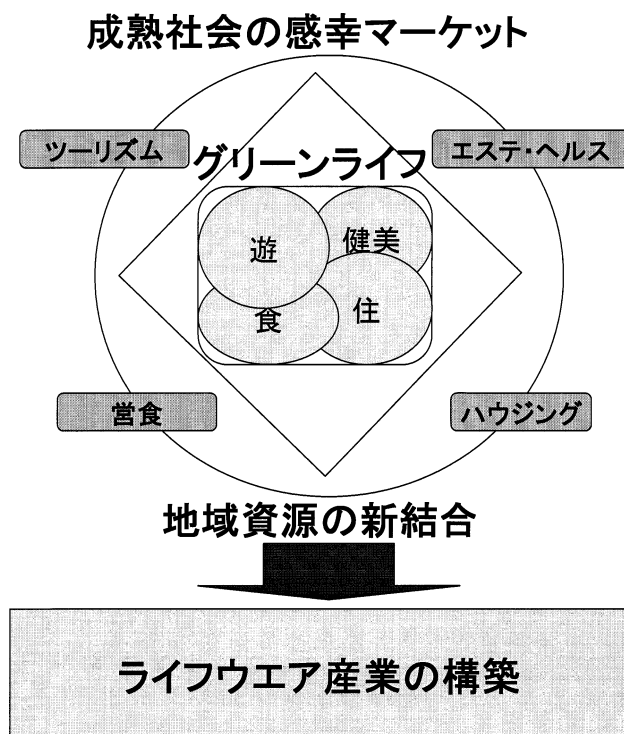


図2 Lifeware産業の概念図

スン)』の4つの生活費支出が16%を占め、こうした健康で美しいライフウェア産業こそ、第1位の基幹産業であると目されている⁹。

⑥いのちを吹き込む風と食でいのちを養う地とが「むす」ばれて、新たないのちの賑わいが起きる「風地観」ツーリズム（健康で美しい暮らしの実現に結ぶライフウェア・ツーリズム）をプロモートしていきたい。『易経』の卦を現代的に読み直すことで第3の新類型ツーリズムを興し、地域内の民産学官連携、グローバルな広域連携で結ぶ、ヒトには元気を与え、地域を再生させるネオツーリズムを興したい。

⑦風地観の「地」=地域自律のツーリズム開発において、食と薬のヘルスツーリズムとセカンドホームツーリズムとをライフウェア産業構築の2本柱に据えられないか。

⑧観光庁発足の今年10月にむけて、ホリスティックなネオツーリズムをニューツーリズム（エコツーリズム、グリーンツーリズム、ロングステイ、2地域居住など）とは種差のある、イノバティブなライフウェア産業として北大大学院観光創造専攻から提唱していけないだろうか。

(2) Japan Tourism Innovation Association の創設

①「日本観光創新学会」をネオツーリズム実現へ向けた政策立案・世論形成・余暇や土地利用の制度設計・地域産業創出にむけての民・学・官連携のアソシエーション、地方再生の新産業創造軸をなす協会としてこの秋にでも立ち

9 拙稿「世界のグリーンライフ 第3回 セカンドホームの時代」、「月刊 ふるさとネットワーク」2007年3月号 p.10、同「最終回 健康で美しく暮らす『みち』」同上 2007年12月号 p.19などを参照。

「グリーンライフ」という概念は、文部科学省検定済み教科書『グリーンライフ』による。この教科書は、高等学校農業科用に新教科として平成17年度から導入され、筆者が監修者となり、概念規定や理念および欧米や日本でのグリーンライフ紹介を行っている。

佐藤誠 篠原徹 山崎光博『グリーンライフ』農文協 平成17年 216頁

さらに、同一の内容で佐藤誠編著『グリーンライフ入門 都市農村交流の理論と実際』農文協 2005年 216頁として、生涯学習用および一般書として公刊された。

上げることは不可能であろうか。

②第1世代の観光系の学会、第2世代のニューツーリズム系学会を止揚して、学界・産業界・行政や政界からの仲間たちを結集して、新しい酒を醸す新しい革袋としてトランスディシプリン学会＝協会を創出したい。グローバル連携のコアにヘッドクォーターを置いて、中央集権の「国のかたち」を超える、感幸の「暮らしのかたち」創出を、地方から全国・世界に仕掛けていく。

③私達の志と私達が向かうべき方向性を以下のように明確に表明する。

明治以降の外需主導のハードウェア産業をベースに、近年の高速情報・交通ネットワークを活かしてのソフトウェア産業を介して、ライフウェア産業としてのネオツーリズム産業を興し、地域再生を果たしながら日本経済を内需拡大と産業高度化で創新すること。

組織論的には、伝統的な学会の常として個人会員を集めるとともに、メタネット組織として既存の学会・協会（社団等の産業界組織）や行政組織・政界に協賛・参画も求めていくというパートナーシップ戦略を採れないか。

④このアカデミックな学会が、同時に各界組織を超えての協会でもあり、ドイツ語の Verein、英語の Association のように、バラバラなものを一つにまとめ、一体的発展をなす軸心・幹を形作り、観光イノベーションの動力源・推進力という機能を果たす。

⑤ Japan Tourism Innovation Association は、その学体系を叢書として発行するために、出版およびメディア対策に関わる特別委員会を設置する。また、その前提として全国ツーリズム研究者のジャンル別業績一覧リストを作成する。

⑥本学会をコアとして、2010年代後半からの勃興が予測されるアジアでのツーリズム・ビッグバンをリードすべく、ネオ・ツーリズムに関するアジアの COE 構築をめざす。その準備のために、北大大学院観光創造専攻をコアとした学際的・実証的なネオツーリズム産業創出を目指しての協働研究体制を立ち上げ、必要な資金・体制を手配する。